

## 高機能広汎性発達障害児・者への支援の取り組み

### —「いわて高機能広汎性発達障害児・者を考える会」の模索・草創—

佐々木全\* 加藤義男\*\* 田代美幸\*\*\*

(2004年2月5日受理)

Zen SASAKI, Yoshio KATOU and Miyuki TASHIRO

On the Support to Children and Adult with High Functioning Pervasive Developmental Disorders

#### I. 問題

文部科学省「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」（2003. 3）に基づき、LD児、ADHD児、高機能広汎性発達障害児への教育的支援を視野に入れた特殊教育から特別支援教育への転換が全国的に進んでいる。このような動向を承けて、岩手県においても、LD児、ADHD児、高機能自閉症児の教育的支援について、教員の研修、指導体制、教育相談、研究に関わる具体的な施策が提案されてきている（例えば、岩手県特別支援教育プラン策定委員会、2002<sup>1)</sup>）。

ところで、上記のような、LD児、ADHD児、高機能広汎性発達障害児に対するフォーマルな教育的支援に先駆けてインフォーマルな教育的支援を行ってきたグループがある。例えば、それは有志の研究グループであったり、「親の会」であったりする。岩手県においては、「岩手LD研究会」や「岩手LD児・者を守る親の会（通称、なずなの会）」がそれにあたる。これらは、この十余年間、LD児、ADHD児、高機能広汎性発達障害児や、彼らと同様の教育的ニーズを有する児・者の教育的支援に力を尽くしている（例えば、田中、加藤、木村他、2002<sup>2)</sup>；佐々木、2002<sup>3)</sup>）。さらに、近年、LD、ADHD、高機能広汎性発達障害について、各論的な研究が進み、それぞれの特性や教育的ニーズの異同が明らかになるにつれ、「親の会」も分化する傾向にある。2000年には、「いわてADHDを考える会（通称、わっこの会）」が発足し、2002年には「いわて高機能広汎性発達障害児を考える会（通称、エブリの会）」が発足した。

「親の会」の意義について、有川（2002）<sup>4)</sup>は「わが国の障害児・者の家族に対するインフォーマルサポートの中心的役割を果たしてきたもの」と評し、また、田中、加藤、木村他（2002）<sup>5)</sup>も親の会は「保護者にとって養育上幾多の節目にあって抱える悩みは、同じような経験を重ねてきた者同士の共感からいやされる場合も多いだろう」と指摘している。さらに、「特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議」（2002）<sup>6)</sup>は「一人一人の教育的ニーズに対応して、質の高い教育をより効果的に推進するために行政関係部局や学校と、草の根的に、独自のネットワークを活用し献身的に取り組む“親の会”やNPOとの連携が重要である」としている。これらのことから、今後、インフォー

\* 岩手県立花巻養護学校、岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力者

\*\* 岩手大学教育学部      \*\*\* 岩手大学大学院教育学研究科

マルな教育的支援のさらなる充実が求められるとともに、その中心的役割として考えられる「親の会」の存在は、さらに重要視されると言っても過言ではない。

さて、筆者らが発足し、活動している「いわて高機能広汎性発達障害児を考える会」（以下、エブリの会と記す）は、高機能広汎性発達障害児の支援と、保護者の自助を目的とし、現在、筆者らが世話人となり、その運営を行っている。そもそも、「エブリの会」の前身は、筆者らの研究グループによる臨床活動（1998.4～2001.3）である通所指導教室、「エブリ教室」（第一期）であった。これは、4名の高機能広汎性発達障害児を対象とし、毎月一回のグループ指導及び個別指導を行ったものである（佐々木、加藤、佐々木、2002<sup>7)</sup>）。その後、筆者らは、「エブリ教室」（第二期）を岩手大学教育学部附属教育実践総合センターにおける臨床活動として再開した（佐々木、加藤、2003<sup>8)</sup>佐々木、加藤、佐々木、2002<sup>9)</sup>；佐々木、加藤、佐々木、2003<sup>10)</sup>）。これが中核となり「エブリの会」に発展した。

エブリの会の活動内容は、「エブリ教室」、「エブリクラブ」、「エブリ学習会」である。順に小学生、中学生以上、保護者やスタッフを対象とした活動である。以下に、それぞれの活動内容について概略を記した。なお、エブリの会の年間活動（2002年度の例）を表1に示した。

表1 2002年度の活動内容

回数	日程	活動名	活動内容	
			活動名	活動の概略
1	4月27日	エブリ教室	取材をしよう	簡単な質問紙を用いて、お互いにインタビューを行い、質問・応答スキルについての経験とした。
2	5月18日	エブリ教室	五感体験プログラム	ペアを組み、一人がアイマスクを着用しもう一人が誘導するといった活動を通じて感情表現や依頼スキルについての経験とした。
3	6月22日	エブリ教室	鬼遊び	独自のルールと専用のコート上での「線鬼」と「氷鬼」を行った。ルールの理解とそれに基づく行動計画の経験とした。
4	7月27日	エブリ教室	買い物	金銭のやりとりと、会計時のやりとりなどの買い物スキルについての経験とした。
5	8月24日	エブリ教室	フルーツバスケット	フルーツバスケットを行い、感情表現やゲームの理解と、それに基づく行動計画の経験とした。
6	9月21日	エブリ学習会	講演会	保護者を対象として、年長の保護者と、臨床心理士の講演を行った。
7	10月26日	エブリ教室	遠足	野外にて、調理活動や靴とばしゲームを行い、総合的な生活経験とした。
8	11月16日	エブリ教室	劇をしよう①	劇の鑑賞により、役割や話の筋道を理解し、個々の児童が独自の「絵台本」を作成した。なお、劇活動は演技を通してのソーシャルスキルトレーニングを兼ねた。
9	12月21日	エブリ教室	劇をしよう②、カードめくりゲーム	演劇によるソーシャルスキルトレーニングと併せて、カードめくりゲームを行った。これは、ルールの理解と、それに基づく行動計画の経験とした。
10	1月25日	エブリ教室	劇をしよう③、カードめくりゲーム	
11	2月22日	エブリ教室	劇の発表会 卒業生を送る会	「劇の発表会」と称して、劇の発表と鑑賞を行った。
12	3月21日	エブリクラブ	なかまづくり	第二期エブリ教室卒業生（2003.4.中学校入学予定の児童）を加えて、自己紹介ゲームやレクゲームを行った。また、参加児童に、エブリクラブの活動目的を伝えた。
13	3月22日	エブリ教室	保護者への報告会	第二期エブリ教室（後期）における、IEPの評価を中心に、保護者への実践報告を行った。

### (1) エブリ教室

エブリ教室は、開催回数、参加人数が多く、エブリの会の中核的活動である。毎月1回（第四土曜日10時から12時半まで）開催し、指導にあたるスタッフは、現職の養護学校教員、大学院生など13名である。IEPを作成し、それに基づくグループ指導及び個別指導を行っている。活動内容の例を表1に示した。小学生を対象としている。

なお、教室の運営は、便宜上2年を1サイクルとしている。現在は、第三期のエブリ教室（2003.4～2005.3）を開催している。ここには、9名の高機能広汎性発達障害児と2名の同胞が参加している。

### (2) エブリクラブ

エブリクラブは、エブリ教室を卒業した児童を対象として、およそ3ヵ月に1回実施している。エブリクラブの前身は、第一期エブリ教室に参加した児童のフォローアップの場としての「エブリ同窓会」であった。この活動内容は、盛岡市近隣の公共施設を使用したレジャーが主であった。

エブリクラブは、2003年3月から、エブリ教室の卒業生を加えて開催している。現在、4名の高機能広汎性発達障害児と、2名の同胞が参加している。

### (3) エブリ学習会

エブリ学習会は、保護者やスタッフを対象として、年1回実施している。2002年9月に、その第1回目を開催、専門家や保護者による講演会を行った。これについては、毎年、筆者ら世話人と保護者の代表をもって事務局を結成し、そこで企画、運営している。

## II. 目的と方法

エブリの会は発足後間もないインフォーマルな教育支援グループである。現在、エブリ教室を活動の中核としつつ、これを含めた様々な活動について、その在り方を模索している段階である。すなわち、筆者らは、エブリの会の現在を「模索・草創」の時期であるにとらえている。2003年3月には第二期エブリ教室が終了し、これをもって筆者らは、教室の運営の1サイクルを経験した。これを契機と考え、本稿においては、エブリの会の活動を振り返り、今後の方向性を探ることを目的とする。

この目的のために、下記の2つを視座として考察する。すなわち、①エブリの会の保護者を対象として実施した調査の結果、②冒頭に記した、インフォーマルな教育的支援の動向、である。

調査では、筆者らが独自に作成した質問項目によって構成した調査用紙を用いた。その概略は以下の通りである。すなわち、①フェース項目（選択方式）、②エブリの会の活動（エブリ教室に重点を置いた）の「よい点」と「見直しが必要な点」（選択方式）、③エブリの会の運営についての意見、要望（選択方式）、④エブリの会への参加前後の心境の変化（記述式）、⑤エブリの会の活動についての意見・要望（記述式）である。調査の対象は、第二期エブリ教室参加の保護者7名とし、無記名にて実施した。なお、調査用紙は2003年2月22日の教室開催時に配付し、2003年3月22日の「報告会」において回収した。

## III. 結果

### 1 回収率

調査の回答は7名から回収した。回収率は100%だった。

## 2 調査結果

表2 児童の概要

児童 (性別)	学年 2003.3 当時	参加状況	保護者から見た、児童が抱える問題※														筆者らによる臨床的診断				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	広汎性発達障害 の症状	Wingの対人関 係の三類型
A児 (男)	3	第二期 エブリ教室	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○					アスペルガー障 害 (DSM-IV)	受動型	なし
B児 (男)	3	第二期 エブリ教室	○		○	○			○										高機能自閉症	受動型	ADHD (多動・ 衝動性優位型)
C児 (男)	4	第二期 エブリ教室	○	○		○		○		○	○		○	○					高機能自閉症	積極奇異型	ADHD (多動・ 衝動性優位型)
D児 (女)	5	第一期エブリ教室 エブリ同窓会 エブリクラブ 第二期エブリ教室	○	○		○			○		○		○	○					高機能自閉症	積極奇異型	ADHD (不注意 優位型)
E児 (男)	5	第二期エブ リ教室			○					○	○	○	○	○	○				アスペルガー障 害 (DSM-IV)	受動型	なし
F児 (男)	6	第二期エブリ教室 エブリクラブ	○	○				○		○		○	○	○					特定不能の広汎 性発達障害 (DSM-IV)	積極奇異型	ADHD (多動・ 衝動性優位型) 発達性協調性運 動障害
G児 (男)	6	第二期エブリ教室 エブリクラブ		○				○					○		○				アスペルガー障 害 (DSM-IV)	孤立型	なし

## ※ 各項目の内容

- 1=言葉の遅れがある。
- 2=他者に対して、あまりにも積極的で、かつ独特の方法でかかわろうとする。
- 3=他者のかかわりには応じるが、自らかかわろうとしない。
- 4=他者のかかわりを拒んだり、避けたりする。
- 5=自分なりの決まりごと(時間を守る、道順を守るなど)を、かたくなに守ろうとする。
- 6=読むことにつまずきがある。
- 7=書くことにつまずきがある。
- 8=数をかぞえたり、計算したりすることにつまずきがある。
- 9=落ち着きがなく、常に動き回っていたり、身体の一部を動かしている。
- 10=ものごとに注意を向ける時間が短く、注意を向ける対象が次々変わりやすい。
- 11=ちょっとした刺激や興味に対して、衝動的に反応し、行動を起こしやすい。
- 12=はさみを使ったり、箸を使ったりすることなどの微細運動が苦手である。
- 13=縄跳びや走ること、投げることなどの粗大運動が苦手である。
- 14=かんしゃくをおこしたり、パニックをおこしたりする。
- 15=友だちとの間で、いじめや、からかいの対象となることがある。
- 16=登校を渋ることがある。
- 17=その他\*

\*その他に記された内容：A児；自分中心に全てを考えているようで、遊びの中で仕切りたがり、ルールを自分流に変更してしまう。家族は対応できるが、周りの人に誤解されやすいと思う。F児；口の回りもなめて真っ赤にする。服の袖口をかじる。

## (1) 第二期エブリ教室の参加児童の概要 (フェース項目から)

第二期エブリ教室の参加児童の概要を表2に示した。性別は、男児は6名、女児は1名であった。このうち、1名(14%)は、第一期のエブリ教室、エブリクラブ(旧エブリ同窓会)にも参加した児童である。また、6学年の男児2名は、エブリ教室を卒業し、新たにエブリクラブに参加した児童である。

「保護者が把握している児童の問題」によると、最も該当が多かった項目は、「縄跳びや走ること、投げることなどの粗大運動が苦手である」であり、6名(86%)が該当した。次いで該当が多かった項目は、「言葉に遅れがある」、「自分なりの決まりごとをかたくなに守ろうと

する」、「書くことにつまずきがある」、「落ち着きがなく、常に動き回っていたり、身体の一部を動かしている」、「はさみを使ったり、箸を使ったりすることなどの微細運動が苦手である」の5項目であり、いずれも4名(57%)が該当した。「その他」には、「(チック)があること」、「自己中心的に、遊びのルールを提案してしまうこと」が挙げられた。

また、以下のような特徴も見受けられた。第一に、対人関係に関わる項目である、「他者に対して、あまりにも積極的で、かつ独特の方法でかかわろうとする」、「他者のかかわりには応じるが、自らかかわろうとしない」、「他者のかかわりを拒んだり、避けたりする」の3項目においては、いずれも3名(43%)が該当した。逆に、この3項目に該当しなかった児童はいなかった。さらに、これら3項目のうち、2項目に重複して該当した児童が2名あった。

第二に、「言葉に遅れがある」に該当した4名はいずれも「自分なりの決まりごとをかたくなに守ろうとする」にもれなく該当していた。

第三に、「はさみを使ったり、箸を使ったりすることなどの微細運動が苦手である」に該当した4名(57%)のうち、3名は、「書くことにつまずきがある」にも該当していた。

(2) エブリの会の活動に対する、参加児童の態度 (フェース項目から)

「エブリの会に対する、参加児童の態度」について図1に示した。7名の児童は、エブリの会に対して、「参加を楽しみにしている(4名:57%)」か「特に楽しみにしているわけではないが、参加することに抵抗はない(3名:43%)」という状況であり、児童にとって、エブリの会が好意的に受け止められていると思われた。

また、保護者から児童に対する活動参加理由の説明を図2に示した。複数の説明をしている保護者もいた。最も該当が多かった項目は「特に説明していない」であり、4名(57%)であった。次いで「スタッフと遊びに行くという説明」、「友だちと遊びに行く」という説明があった。いずれも2名(29%)である。「その他」の2名(29%)のうち、1名に記述があり、「人間関係の不足を補うため」という回答があった。

図1 児童の参加の態度

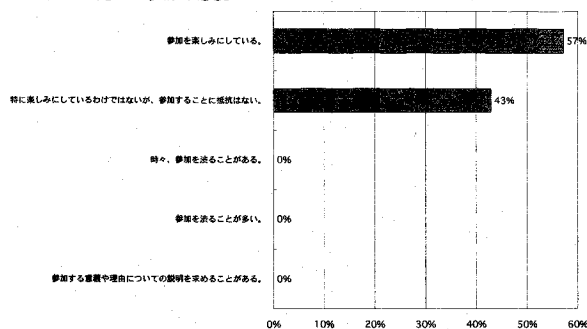
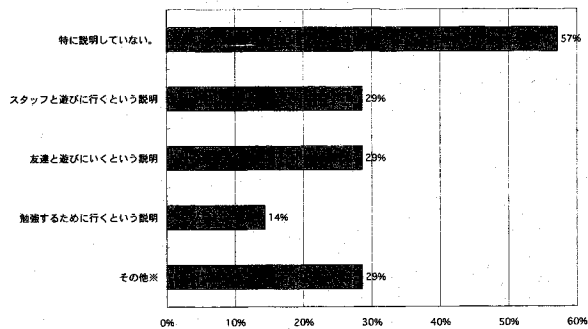


図2 保護者から児童への、活動参加理由の説明



(3) エブリ教室についての評価

エブリ教室における、よい点について、図3に示した。なお、これと併せてエブリ教室における「改善が必要な点」や「それに関する具体的な要望」を調査した。これについては、文中に記した。

①開催の回数については、現在の月1回でよいという回答が6名(86%)だった。1名(14%)からは、「月2回にしてほしい」という要望が寄せられた。これは、児童が「月2回であれば、友だちのことを覚えることができる」という考えによるものだった。

②指導体制については、現在のマンツーマン体制でよいという回答が6名(86%)だった。改善などの要望はなかった。

③活動内容については、現在の取り組みでよいという回答が4名(57%)で、1名(14%)から「子どもの苦手な活動を入れてほしい、例えば、紐結び、縄跳びなど」という要望が寄せられた。

④IEPについては、現在の取り組みでよいという回答が3名(43%)だった。1名(14%)から改善が必要という回答があった。具体的な要望の記入はなかった。

⑤活動の記録の配布については、7名(100%)が現在の取り組みでよいと回答した。活動の記録とは、毎回の活動の個別記録であり、エブリ教室で開発、使用しているIEPの様式「PDSパック」でいうところのD様式である(佐々木, 加藤, 佐々木, 2003<sup>10</sup>)。これは、IEPに基づく指導を「指導方法とそれに対する児童の行動との関係」から評価、記録するところに、オリジナリティーがある。このねらいは、指導方法の共有にある。使用例を図4に示した。なお、活動の記録の活用方法について、図5に示した。これによると、「お子さんの様子を知る情報源としている」が6名(86%)、「お子さんとかかわる際の参考としている」と「お子さんの様子を家族や学校に伝える資料としている」が共に2名(29%)だった。「お子さんとかかわる際の参考としている」とした保護者の一人は、「ほめることの大切さを感じた」と付記していた。

図3 エブリ教室のよい点

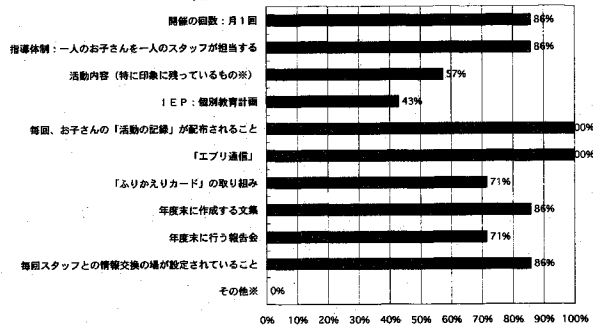


図4 D様式の使用例

■ エブリ教室・個別記録		対象児童: 6 君 (6学年)	指導年月日: 2003年1月25日 (土)
		担当スタッフ: 原谷綾子 (今回他、及川)	指導の場: 教育学第1号室 (320, 329)
(1) 自分から、挨拶をすることができ。	挨拶に回答する際、アイコンタクトをすることができ。	○	・スタッフに挨拶されると一瞬驚いたような表情をするが、アイコンタクトを短くし回答した。 ・表情をかえず、挨拶をかわすと、すぐに離れてしまうことがあった。 ・出会い目に「全先生おはようございます」と視線を向けて挨拶した。 ・帰り際、A君の姉とF君に「さようなら」と声をかけ、握手を求めていた。
	挨拶に回答する際、動作(笑顔、手を震る、互いの手でタッチする)を返すことができる。	●	
	挨拶をする際、アイコンタクトをすることができ。	○	
(2) アイコンタクトの意味や必要性を理解し、視線をアイコンタクトコントロールすることができ。	話しかけられたときなどに、話し手に視線を向けることができる。	○	・前を呼ばれると「はい」と返事をし視線を向けた。 ・視線を伏せていることが多かった。「G君」と呼びかけると視線を上げた。
	グループ全体への呼び掛けに応じ、「1」に視線を向けることができる。	△	
(3) 劇活動において、その内容を理解したり、演技したりすることができる。	やりとりの開始時など、視線が必要な際に、アイコンタクトを行うことができる。	○	・カードめくりゲームの際、F君とF君の弟に対して、大きな声で生動的なことばを掛け、なかなか止まらない。田代が「F君が今言っていることは、相手は聞き取らないから、だからさういふことばを聞いてください。聞いてもらってほしいです」と話す。「はい」といって聞き取った。 ・劇活動では、「私が話すセリフについて、繰り返しが多いことを指摘し、「さっき聞いたよ」とか「前回も言うよ」と指摘を続けた。このことについて
	大きな声でゆっくり話すことができる。	○	
	台詞を話す際、相手を見ることができる。	○	
	台詞を話している相手を見ることができる。	○	・「ヘルプミー」の場面、ばあさん役の、F君の弟に対して視線を向けながら台詞を話した。 ・「ヘルプミー」の場面、ばあさん役の、F君の弟が応答する際、彼に視線を向けた。自分が話すときに比べ視線を向ける時間は短いことがあった。
(評価の観点) ○: 自分で判断し、行動したとき。 △: 注意の促し(指さしや「ほら」等の声かけ)で行動できたとき。 ▲: 直線的な指導(「～しなさい」等の指示、手をとる等の補助)で行動できたとき。 ●: 行動できなかったとき、指導方法が思い浮かばなかったとき。 -: 指導場面がなかったとき。			
特記事項 (スタッフから)		・ふりかえりカード発表時、事前の、スタッフからの指示はなかったにもかかわらず、発表で、視線を上げることが自ら行った。また、ふりかえりカードには、「表情が分かる様子を聞いてください」とのスタッフの指示に応じて、笑顔で挨拶する「10ゲーム」の画面を指した。文集では「エブリクラスのみならず」ということばがあった。おやつ時に始まった「エブリ・クラブ」のことと関係したのか、「エブリ教室」を自ら発表したことばがあった。 ・「2人のスタッフと2人の友達に挨拶しよう」との1の指示で近くにいたA君の姉とF君に挨拶、握手をしていた。	

⑥エブリ通信の配布については、7名(100%)が現在の取り組みでよいと回答した。エブリ通信とは、毎月の活動を写真と文章でまとめたものである。

⑦「ふりかえりカード」については、現在の取り組みでよいという回答が5名(71%)だった。「ふりかえりカード」とは、毎回、活動終了時に記すワークシートである。改善が必要と回答した

のは1名(14%)だったが、「アイコンタクトなど、特定の課題だけではなく、いろいろなこだわりなどに関することにも触れてほしい」という要望だった。

⑧年度末に作成する文集については、現在の取り組みでよいという回答が6名(86%)だった。文集は、毎回のふりかえりカードを中心に綴ったものである。改善などの要望はなかった。

⑨年度末に行う報告会については、現在の取り組みでよいという回答が5名(71%)だった。報告会は、IEPの評価を話題の中心としている。改善などの要望はなかった。

⑩毎回スタッフとの情報交換の場が設定されていることについては、現在の取り組みでよいという回答が6名(86%)だった。改善などの要望はなかった。

#### (4) エブリの会の運営についての意見・要望

エブリの会への意見・要望については、「保護者同士の交流を充実させたい」が2名(29%)、「保護者とスタッフとの交流を充実させたい」と「学校や専門機関、関係する親の会との連携を充実させたい」が1名(14%)だった。

#### (5) エブリの会の活動へ参加する以前と、現在の心境

エブリの会の活動へ参加する以前と現在の心境について、表3に示した。回答の記述を見ると、二種類の内容に分類することができた。第一は、「学校へ行ってもいつも私(母親)一人で閉じこもっている状態で孤独感があったが、卒業へ向けての行事とか中学生になるための準備の時のプレッシャーにも、他のお母さんたちが支えてくれているというか、分かって下さるように感じて心強く進むことができた」といったような内容の、「保護者自身の心境の好転」であった。

第二は、「(子どもは)人との関わりを避け、一人で遊ぶことが多かった。会話がうまくできなかった。現在では、学校の友だちと一緒に遊べるようになった。“単語”の会話から、普通に話せるようになった。全体的に明るくなった」といったような、「児童の成長の確認、実感」であった。

#### (6) その他、エブリの会の活動についての意見・要望

その他、エブリの会の活動についての意見・要望については、「活動の様子を見学したい」という要望があった。また、エブリクラブに関連して、「エブリクラブに参加していない家庭のために、エブリクラブのことを記したエブリ通信を回覧してほしい」という要望があった。

図5 「活動記録」の活用方法

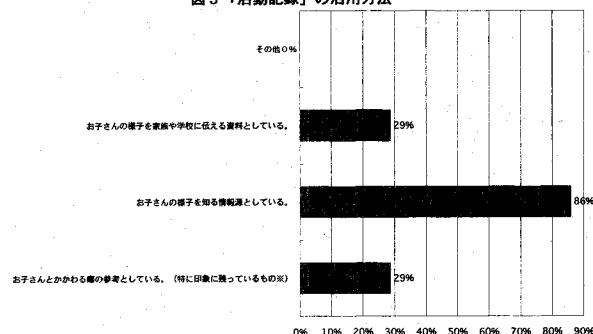


表3 エブリの会の活動へ参加する以前と、現在の心境

分類	記述
「保護者自身の心境の好転」	<p>・(子どもは)養護学級に入っているが、1年生の時エブリ教室がなかった。その1年間は子どもも学校に慣れず、先生も「こんな子どもはあまり見たことがない」と、おっしゃるほど、出来るところと出来ないところの差が激しく、周りに模倣できる子もいなかったからかな?とあせりや不安の多い1年を過ごしていた。1年の勉強にはついていけそうに思えた。エブリ教室に参加している児童には、普通学級に通われている方が多いので、始めはショックもあったが、現在では、少しずつ子どもの状態がよくなってきて、自分のことも冷静に考えられるようになり、親子で安定した状態になった。上の子のことも心配が多かったが、兄弟の苦労も他の親の方と共感できることが多くなった。また、上の子自身もいろいろ考える機会をもてたのが何よりで、今ではエブリスタッフの人のように子どもに関わる仕事をしたいと言ってくれている。長い人生なので、人にだまされず、罪を犯さず、まじめに働き人から愛されて生きていけば良い訳で、無理せず、養護学校で心の成長を手助けしていきたいと思っている。これからはいろいろと考えが変わるかもしれないが、一生、親子で勉強していきたいと思っている。</p> <p>・子どもに対しては他の普通の子達とどうしても比べてしまい、子どもに注意したり、しかったりすることが多かったと思う。現在では、加藤先生などをはじめ、スタッフの方に相談できる安心感と、同様な子をもつお母さんたちとも話す機会に恵まれ、親子とも心強い。</p> <p>・学校へ行ってもいつも私(母親)一人で閉じこもっている状態で孤独感があったが、卒業へ向けての行事とか中学生になるための準備の時のプレッシャーにも、他のお母さんたちが支えてくれているというか、分かって下さるようになって心強く進むことができた。</p>
「児童の成長の確認,実感」	<p>・(子どもは)人との関わりを避け、一人で遊ぶことが多かった。会話がうまくできなかった。現在では、学校の友だちと一緒に遊べるようになった。「単語」の会話から、普通に話せるようになった。全体的に明るくなった。</p> <p>・とにかく落ち着きがなく、じっとしていることができなかった。特に葬儀の時などはひどくて、肩身の狭い思いをした。現在では、家庭以外にありのままの自分を出せる場所がある事が良い結果につながっていると思う。毎日接している親たちよりも、周りの人から「しっかりしてきたね。」と言われる事が多くなってきた。ただ今は、中学とエブリ教室卒業がかなりストレスになっているようだ。</p>

#### IV. 考察

##### 1. エブリの会の保護者を対象として実施した調査の結果をとおして

調査結果からエブリの会の方向性を考察する。調査結果では、改善が必要な点として、「具体的な要望があった事柄」、「改善の必要性が指摘されていたものの、具体的な要望がなかった事柄」の二種類の回答が得られた。エブリの会の今後を考えるにあたり、両者への対応が求められるだろう。まず、前者への対応は、保護者の要望をできるだけ取り入れる方向ですすめたい。具体的には表4に一覧した。

一方、後者については、エブリの会の取り組みを継続することによって、その問題点や改善の方向性を明らかになると考える。すなわち、エブリの会の活動を継続することこそ、今後最大の課題といえる。また、「保護者同士の交流を充実させたい」、「保護者とスタッフとの交流を充実させたい」という回答もあった。これについても、継続する活動の中でよりよい方法を模索して行きたい。

また、「参加児童の態度」から、児童にとってエブリの会が好意的に受け止められていると思われた。さらに、「エブリの会の活動へ参加する以前と、現在の心境」として、保護者の心境の変化を調査した。この結果において、保護者に好ましい心境の変化があったことを読み取った。「保護者自身の心境の好転」であった。これらは、数値化しにくい事柄ではあるものの、まぎれもないエブリの会の成果であると言えるだろう。そして、これらにみる、児童と保護者の心境は、エブリの会の活動の



継続を支持するものと解釈できる。

上記から、エブリの会の今後の方向性を「継続」というキーワードに収束する。継続は、ときに立ち上げ以上の努力を要する。継続は力なりと言うが、継続するだけの力も必要となる。その力とは何か、一つは、保護者やスタッフ個人、そして会全体のモチベーションである。もう一つは活動の成果である。そして、両者をつなぐのは成果を得るための科学である。科学とは、スタッフ個々の実践的な知識・技能、会全体の組織的な機能である。「惰性」ではなく、「慣性」で一定水準の質を保ちながら機能する会をめざしたい。

なお、今後の課題として加えたい事柄がある。エブリクラブや学習会についての評価と検討である。これにより、エブリの会全体像の評価と検討になるからである。

## 2. インフォーマルな教育的支援の動向をとおして

本稿の冒頭で記したインフォーマルな教育的支援の動向から、エブリの会の方向性について考察する。

「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」の「“親の会”やNPOとの連携が重要である」という記述は、今後、フォーマルな教育的支援側から、インフォーマルな教育的支援へ連携を求めるといふ胎動である。また、田中、加藤、木村他（2002）<sup>11)</sup>は、LD,ADHD、高機能広汎性発達障害それぞれの親の会同士の「相互の接近を望む」としている。これらを歓迎すべく、調査結果には「学校や専門機関、関係する親の会との連携を充実させたい」という回答があった。

加藤（2002）<sup>12)</sup>は、LD,ADHD、高機能広汎性発達障害を含む、軽度発達障害児の支援について、今後の課題として「支援ネットワークづくり」を挙げている。これには、上記した連携の二つの形態が内包されるだろう。すなわち、①「インフォーマルな教育的支援とフォーマルな教育的支援との連携」（エブリの会と学校）、②「インフォーマルな教育的支援同士の連携」（エブリの会と、他の親の会）である。

上記より、エブリの会の方向性を、「連携」というキーワードに収束する。「支援ネットワーク」の具現化は、「現在進行形の課題」との表現が適切であろう。「支援ネットワークづくり」の具体例として、特定の児童の指導に関する連携や、学習会などによる情報交流としての連携などが想定される。来るべき「インフォーマルな教育的支援とフォーマルな教育的支援との連携」のためにも、現在は、エブリの会の実践を蓄積したり、また、「インフォーマルな教育的支援同士の連携」を広げ、深めたりする必要があるだろう。それが、インフォーマルな教育的支援グループの強みになるからである。

そこで、エブリの会のような、インフォーマルな教育的支援を中心とした「いわて軽度発達障害児・者支援ネットワーク（仮称）」の構想を提案したい。岩手県においては、県庁所在地であり、筆者らの活動の拠点でもある岩手大学がある盛岡市を中心に、インフォーマルな教育的支援が活動している。また、2002年度から水沢市において、エブリ教室のスタッフの数名が関わり、軽度発達障害児を対象とした通所指導教室が立ち上げられ、毎月1回活動している。この他にも、岩手県の内陸中央部から内陸南部にかけての複数の地域で、軽度発達障害児のためのインフォーマルな教育的支援の胎動がある。岩手県の広大な県域という地理的な条件による、諸々の教育的支援における格差は、加藤、石坂、佐々木（2002）<sup>13)</sup>が課題視するところであるが、いずれ、岩手県における「支援ネットワーク」の発端として、あるいは、モデルとして内陸地域からの発信が必要であろう。現存する、あるいは胎動するインフォーマルな教育的支援グループの接近を能動的にすすめたいものである。

かつて高機能広汎性発達障害児の支援は、「点」すなわち保護者のみによって支えていた。そして、

表4 エブリ教室の改善の要望と、それへの対応

項目	要望	対応	説明
開催の回数について	・現在の月1回を月2回にしてほしい	保留	筆者らを含めてスタッフは、現職教員及び大学院生が中心である。このようなスタッフの条件から考えると、月2回の開催で、かつ、現在の活動の質を維持することは、やや難しいように感じている。特にも、「現在の取り組みでよい」との100%の回答を得た「活動の記録」や「エブリ通信」の作業量や内容のスリム化が検討されなければならない。いずれ、スタッフの、エブリ教室運営にかかわる作業量の調整が必要である。 現段階では、エブリ教室自体の運営について、ある程度の定型を見出したいとの考えから、第三期が終了するまでは、月1回の開催で進めたいと考えている。
活動内容について	・子どもの苦手な活動を入れてほしい、例えば、紐結び、縄跳びなど”	取り組む	具体的なニーズに対しては、苦手な活動でも、楽しく取り組み、達成感を味わえるような工夫と課題分析を行ない、活動に取り入れていきたい。
「ふりかえりカード」について	・アイコンタクトなど、特定の課題だけではなく、いろいろなこだわりなどに関する事にも触れてほしい	取り組む	より具体的なニーズを把握した上で、取り組みたい。また、「ふりかえりカード」のみならず、活動中に使用する別のワークシートに取り入れた方が実践的であるとも考える。対象児の実態や、活動内容に応じて使い分けたい。
その他	・活動を見学したい	諸条件に配慮しつつ、取り組む	エブリ教室の活動中、保護者は、別室にて情報交換などを行なっている。この際、スタッフでは、筆者らのうち、加藤が相談役として加わっている。これが習慣化しているために、活動の見学がこれまで行なわれてこなかった。ただし、エブリ教室における劇活動の一環である、劇の発表会では、保護者に対して、劇を披露している。それ以外の、活動を見学するにあたっては、筆者らスタッフにとって問題にはならない。活動内容によっては、狭い部屋を使用することもあり、物理的な制約を受けることが予想される。また、特定の児童が見学されることを拒んだり、活動への集中を維持しにくくなったりということが予想される。これらの条件に配慮しつつ、見学の場面を確保していきたい。また、保護者と児童、スタッフが交流できる活動なども計画していきたい。
	・エブリクラブのことを記したエブリ通信を回覧してほしい	既に実施	エブリ教室とエブリクラブの情報交換も大切だと考える。

エブリの会によって、「線」すなわち保護者、スタッフによって支えられるようになった。そして、今後、様々な専門機関との連携を得て、「線」が相互に交わる「網（ネットワーク）＝面」で支えられることを切に願う。

### 3. 今後の課題

上記より得られた今後の課題を整理すると、次の通りである。①エブリの会の活動の継続と、さらなる実践的な検討。②エブリの会に対する保護者の要望への対応。③エブリクラブやエブリ学習会についての評価と検討。④「インフォーマルな教育的支援とフォーマルな教育的支援との連携」（エブリの会と学校）。⑤「インフォーマルな教育的支援同士の連携」（エブリの会と、他の親の会など）。

#### 【謝辞】

本稿をまとめるにあたり、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。まずは、エブリの会の保護者の皆様、そして、共に活動しているスタッフ皆様、そして、魅力溢れる参加児童の皆様。

#### 【文献】

- 1) 岩手県特別支援教育プラン策定委員会（2002）：岩手県におけるこれからの特別支援教育の在り方—一人一人に応じた教育を充実するために—（中間報告）。
- 2) 田中弘美，加藤義男，木村真他（2002）：LD 及びその周辺児が抱える問題と支援について，LD 研究，11（1），2-11。
- 3) 佐々木全（2002）：なずな教室における実践報告—言語の遅れを伴う ADHD 児の特性に応じた指導—，LD 研究，11，1，32-40。
- 4) 有川宏幸（2002）：自閉症児・者をもつ家族の地域支援のあり方，特殊教育学研究，40，4，430。
- 5) 田中弘美，加藤義男，木村真他（2002）：前掲論文，9。
- 6) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2002）：「今後の特別支援教育の在り方について」（中間報告）
- 7) 佐々木京子，加藤義男，佐々木全（2002）：高機能広汎性発達障害児の指導に関する実践的研究—認知特性に注目して—，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，1，205-218。
- 8) 佐々木全，加藤義男（2003）：「エブリ教室」における実践報告—高機能広汎性発達障害児に対する，劇活動によるソーシャルスキル指導の試み—，LD 研究，12，1，15-23。
- 9) 佐々木全，加藤義男，佐々木京子（2002）：高機能広汎性発達障害児への指導に関する実践的研究（2）—「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第一報）—岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，1，219-231。
- 10) 佐々木全，加藤義男，佐々木京子（2003）：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第二報）—IEPの作成マニュアル「IEP-PDS パック」の試み—，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，2，203-227。
- 11) 田中弘美，加藤義男，木村真他（2002）：前掲論文，9。
- 12) 加藤義男（2002）：特別な教育的ニーズをもつ児童への支援をめぐる諸問題—ADHD,LD, 高機能広汎性発達障害を中心として—，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，1，189。
- 13) 加藤義男，石坂直康，佐々木全（2002）：LD 及びその周辺児に対する教育支援の実態と課題，岩手大学教育学部研究年報，60，1，22。